

ひ と り ご と

4 回生(35代) 佐藤 慈子

果たして「探検」という言葉に一目惚れせずに入部した人はどれだけいるだろうか。殆どいではないのだろうか。何か楽しそう、凄いいこと、血が騒ぐ……など印象は様々だろう。今、私が4年という短い探検部生活(文字通り“生活”である。合宿中と授業中と、どららがふだんの生活だったか。答えは親の前では言えない)を振り返ってみて言えることは、上記の印象が部活動をする上で一番大切なことだということ、そしてそれが蔑ろにされつつあるのではないか、ということである。

入部した当初は、何もかもが初めてで楽しくてしょうがなかった。しかし時が経つにつれて、計画を練る段階で、探検らしからぬという理由で却下されてしまうのを知りショックを受けた。探検的か否かの基準は何なのか、誰が決めるのか、誰の為の探検なのか。「探検部」にいるが為に与えられる無言の圧力を強く感じた。

合宿の形態は随分変化してきているように思う。以前は大掛かりな海外遠征のトレーニングとしての合宿が殆どだった。だが近年、部員の数が倍以上に増えた。上級生1人に約3人の割合だ。それに、大学4年間の力量で実質的探検のできるような場所(未踏峰、未漕破の川など)

はほとんどないだろう。そんな状況下、単発的な合宿が増えてくる。でもそれはそれでいいと思う。自然な流れだ。前者の合宿が、目標となる遠征を安全裡に終了できる為の課題を挙げてその成果を問うものであるのに対し、後者の合宿にとって前者にあたる成果とは全員が行なってよかったと思えるもの、感動の余韻が次の合宿の計画へと駆り立てるもの、であると思う。

「合宿の時期になったからとりあえずどっか行かな。」こんな義務的な気持ちで参加したらもうおしまいである。探検部員の意味がない。やめた方がマシだ。だからこそ大きな“遠征”という目標をもたない部員にとっての、‘単発的’で‘模索的’な合宿の中で一番大切にしないといけないものとは、入部当初のあの印象、あの感情だと思うのだ。楽しそう、面白そう、見てみたい、行ってみたい、やってみたい、…よし、いっちゃってみるか!

しかし「楽しい」という言葉には、どうも探検らしからぬ印象が強くなりがちなようだ。しかし、タノシイこととラクなこととは同じではない。確かに楽しむことも場合によっては(手段として)必要だが、目的までをも楽なものにすることは楽しいことでも何でもない。我々は

ピクニックに行ったりバーベキューをしたりする集団ではないからだ。無論、ピクニックやバーベキューが悪いといっているのではない。そんな分かりきった事を言いたいのではなくて、強調すべき点は「楽しみ」とは人により千差万別である。だから、計画を立てる人はどのような「楽しみ」をこの合宿で見いだそうとしているのか、理解しようとする姿勢が大切だということである。計画を立てる者はもちろん、参加する者も、見守る者も、だ。

だが、「楽しみ楽しみ」といっても、肝に銘じておくべきことがある。それは、我々の夢やロマンといったものは、一步間違えれば“死”によってその終わりを迎えてしまうということだ。常に、どんな時も、細心の注意が必要である。どんなことでも事故につながるということを、意識しすぎたら何もできなくなってしまうが、やはりしなければいけない。上回生、特にCL、SLはそうである。『はじめに夢ありき』かもしれないが、その夢も‘厳しい現実の上’で、はじめて築かれる。「楽しみ」も‘自然の畏れ’を知ってはじめて味わえるのだらうと思う。このことを忘れた時、あるいは無視した時に関大探検部の歴史は二度目の犠牲によってその幕を閉じざるを得なくなるだらう。そんなことは絶対に許されない。

『あらゆるものに興味を覚え、驚きと興奮の渦に引きずり込まれるもの、それを具体的な行動で表現するものが探検活動だといっているだろう』一回生の時に出会ったある先輩のこの言葉だ。ここで「探検とは何か」を論じるつもりはない。これからだってないだらう。ああでも

ない、こうでもない、と答えのない事について論じるのは無意味だと思う。何故答えがないといえるかといえば、さっき述べたように、探検活動の素とは“とっておきのお楽しみ”から生まれ、それは人によって千差万別だからだ。

「これこそが探検だ！」というこだわりのようなものを勝手に持つのはいいと思う。どんなものか聞いてみたい。だけど探検とはこういうものだ、と定義づけてしまうのはおかしいとおもうのだ。話が少しそれてしまったが、私はこの上記の先輩の言葉をずっとずっと胸の中で大切に温め続けてきた。「探検」という言葉の負（マイナス）の部分の圧力に潰されそうになったことも何度かあったが、正（プラス）の部分の大きな力によって、私もここまで続けてこれたのだ。この力はOGになっても大切にしてい、そして求めていきたいと強く思う。そうすれば心を錆び付かせることもなく、いつまでもネエルギッシュに、永遠に若く（ちょっと年寄りじみた言い方だが……）、そして私らしくいられることだろうと信じている。「探検部」と命名して下さった先輩方の意志を私は今このように解釈し、受け継ぎ、伝えていきたいと思っている。

このように思うのも、自分が今まで経験した合宿がどれもこれも実に素晴らしく、楽しかったからに他ならない。（あのガイエンでさえ、過ぎてしまえば楽しいもんだ……）思い出すのは、辛い行程にうなだれ、喘いでいる姿、加えて、それを打ち消すように大笑いしてはしゃいでいる姿、そして生まれてはじめて見る世界を前に、全身鳥肌の嵐のまま立ちつくしている姿……。

改めて思い起こしてみれば、随分色んなところへ行って来たんだなぁ、と自分でも関心する。まるで、合宿での思い出がひとつの輝くビーズに変わり、それを糸に通してできた長い長い首飾りを眺めている気分だ。そのビーズを見ると、ひとつひとつの合宿の度に私は確実に明るくなったと思う。そして強くなったとも思う。(とはいってもまだまだアオイヒヨッコですが) 入部前に比べて“明るさという強さ”のような図太さかなり身についたように思うのだ。これは私一人では決して得ることのできないものだろう。これまでに会った多くの人達と、同じ釜の飯を食い、同じ屋根の下で(テントの中で)眠った貴重な時間から得た産物であり、佐藤慈子の元気の素、そう、一生の宝物である。

こうして、出会ってきた沢山の顔を思い浮か

べてしみじみ思う。「みんな、ええ顔してんな。」こんなことは本人の前ではなんだか照れてしまって絶対に言えないが、心底そう思う。私には神様が与えて下さらなかった(当然)見事すぎるお髭、ムキムキと盛り上がってる腕、広い背中や、すね毛だらけの足など、女子校6年育ちだった私にはいささかオドロキものだったが、そんな姿で激しく動き回っている最中に、チラッと少年っぽいしぐさや表情なんかがこぼれ落ちるのを見る時、一瞬ギャップにドキッとするけれど、何だかとても嬉しくなる。そして確信する。「みんなホンマにええ父ちゃんになるわ」だから私だって負けていけない、「絶対にええ母ちゃんになろう」と、みんなを見るたび密かにそんなことを誓っていたりする私であった。○×年後のOB総会をお楽しみに……?

